

令和七年度 平和文集

「いま、語り継ぎたいこと」

〜戦争と平和〜

東大和市



く恒久平和を願ってく

「いま、語り継ぎたいこと」

く戦争と平和く

発刊にあたって

この平和文集は、東大和市民の皆様の戦争体験を後世に伝え、平和の大切さを広く訴えることを目的として、平成十五年度から、発行しているものです。

今年も、戦争を体験された市民の皆様のご想いをお寄せいただき、また、多くの児童・生徒の皆様より、戦争のない平和な世界への願いを届けていただきました。

東大和市では、平成二年十月に「東大和市平和都市宣言」を行い、平和を愛する全世界の人々と手を携えて、戦争と核兵器のない世界の実現にむけて努力することを誓いました。

さらに、今年には戦後八十年という節目でありますことから、当時、広

島で被爆体験された方や遺族会の方にご協力いただき、戦争当時の貴重なお話をお伺いし、この文集に掲載させていただきました。

当時を語ることができている方が減少する中、その言葉を平和文集のよう
に形ある物として後世に残すことは非常に意味があるものだと感じて
おります。

この平和文集が市民の皆様的心に届き、恒久平和の実現の一助となる
ことを願っております。

本文集の発刊にあたり、原稿をお寄せいただきました皆様、インタビ
ューを受けていただきました皆様及びご協力いただきました関係者の
皆様に厚く御礼申し上げます。

令和七年八月

東大和市長 和地 仁美

目次

戦争体験記

孫達に話したい事	上田 佐知子	2
平和への恩返し「花葉心雑草の会」	大月 孝彦	8
今は亡き夫とその両親に捧げる戦争体験記	河野 八恵子	15
防空壕での魂しいの食べ物「くわの実」	友利 巖	26
東京大空襲	日野 テル	28
小学生の作文		
戦争や平和について聞いたこと、知ったこと、思うこと		31
中学生の作文		
戦争や平和について聞いたこと、知ったこと、思うこと		131

戦後80年事業 戦争体験インタビュー

田戸 サヨ子氏 インタビュー ……………

小嶋 千代子氏 インタビュー ……………

東大和市平和都市宣言 ……………

東大和市戦争体験映像記録

「沈黙の証言者」～私たちのまちは戦場だった～ ……………

平和文集について

※氏名の五十音順で掲載しています。

※編集に当たっては、基本的に原文のままとしています。

※五人の方から戦争体験記を、四十七人の小学生、十二人の中学生から作文をお寄せいただきました。

戦争体験記

第二次世界大戦（太平洋戦争）の戦争体験記

孫達に話したい事

上田 佐知子（八十六歳）

昭和二十年春、鶯谷の駅の立木がメロメロと魔法使いのおばあさんの手のように揺れながら倒れて行くのをいつも読んでいた絵本の一頁のように防空壕の中で見上げていました。あの頃はどこの家でも玄関先に水の張った防火用水が備えてあり、その中に大きな布団をざんぶり落とし布団の両端を母と祖母が持ち落ちる水を頭からかぶりながら五才の私は三才の妹をひきずるように引っぱりながら走りつけました。八十才を越えた私の頭の中に鮮明に残っています。翌朝はもう大変、上野動物園に通じるガ-

ドの道を、焼け出された人達の行列を一日中ぼんやり眺めていました。父は出征しており、長女の私が五才三才ともう一人下の妹と、祖母と母と女ばかりの五人で父の実家にその後すぐに疎開しました。昭和二十年八月一才になる妹は栄養失調で亡くなり、あんなに元気だった祖母もあつという間に旅立ちました。父が出征する時に撮った家族写真のまん中でかわいく笑っている赤ちゃん、満一歳の誕生日も祝ってあげる事も出来ずに。五十代で逝った祖母、妹には暖かいミルクを、祖母には炊きたての白い御飯を食べさせてあげたいと炊飯器を開ける度に思います。終戦の年、私は国民小学校の一年生の夏でした。今は無料で頂ける教科書も疎開の子には知り合いもなく上級生に借りに行け

ずとなりの子に見せて貰うのが精一杯、ザラザラの紙に書いたり消したりして文字を覚え、数字を覚えました。鉛筆も手に握れなくなる迄使い切り子供には子供なりの苦労があつたのですが、都会育ちで一人娘だった母の疎開先での苦労は大変だつたと思います。母は羽織をカボチャに着物を小麦粉に替えて、私は小学生ながらそれらでほうとうやすいとんを作ったりしたものです。小学校の三年生だつたか四年生の頃だつたか初めて木炭車のトラツクの荷台に学年全員の子供が乗り河口湖の遠足に行きました。御坂峠の登りで車が故障それでもどうにか河口湖迄行った想い出の写真が残っています。その頃学校で靴、傘、学用品等が配給になりましたが、何とクラスに一品ずつで数が少

なく先生の作ったクジ引で品物を手にする事が出来たのですが私はクジ運が悪くなかなか当たりません。ようやく当たった白い布製のランドセル、嬉しくって走って帰ったのですが、春に入学する妹のものとなり私は母が作った袋カバンで通学しました。実は私が入学する時母はどこからか赤いビロードに大きな花の絵のあるステキなランドセルを買ってきてくれもう毎日嬉しくて自慢でしたのにある日下校時に夕立にあい、家に着くとベロベロに。あのランドセルはボール紙に布を貼りつけたもの、修理も出来ず大泣きしました。今では笑い話ですがテレビのピカピカの一年生のコマーシャルを見る度にあの時の淋しさ悲しさがこみあげてきます。シベリアで捕虜になり私が五年生の

時帰国した父は体がボロボロで入院退院のくり返しの生活でした。当時私達は電気のないお蔵を借りて住み、母手作りの帯芯とインク壘の石油ランプが唯一の灯でした。ほうとうを煮る鍋のまきの明るさで宿題をし布団の中でシリトリやナズナズをして結構楽しかったです。夏の夜は蚊帳の中で放した蛍の綺麗だった事。今でも山梨のあの辺り蛍がとんでいるか知ら？六年生になり電気のある家に引越しました。今私は三女の娘家族と同居しており孫にも恵まれ幸に暮らしています。あの頃とくらべ今の暮らしはなにもかも便利になり随分変わりました。なにもかも豊になりあの頃の話や孫達に話しても解ってもらえませんか。テレビで放映された蛍の墓に涙する私にやさしい言葉をかけ

てくれる孫にあの主人公は、バアバと同じだよと話すと思
じられない顔をします。無理ないと思います。八十年前の
事ですから：孫六人ひ孫二人いつかあの時代一生懸命親
を助け家族を思って生き抜いた事を聞いてもらいたいと
思います。今でも世界では戦争をしている国のニュースを
見ます。どうして人類は戦争などと言うおろかな事をくり
返すのでしょうか。戦火の子供達の無事を願わずにはいら
れません。

平和への恩返し「花葉心雑草の会」

大月 孝彦（八十歳）

旧日立航空機（株）立川工場は、昭和19年の9月、最多一万三千人ほどの人が働いていた大工場だった（東大和市駅から玉川上水駅沿線と桜街道沿いの一帯を有する地）。

亡き父は軍人として旧日立航空機立川工場（大和村）に配属され、ここを務め先として今で言う事務職を行っていました。この工場では、エンジンを製造していたと聞いており出入りは厳重だったとのこと。

この立川工場に対する最初の空襲時、機密書類を保護する為に防空壕へ避難したものの、簡易な防空壕だった為か

防空壕は倒壊し、その下敷きになり亡くなった人は76名と聞いております。この時の艦載機（米の航空母艦から攻撃）87機が、第1く3波に分けての空襲に及びました。

重機の無い時代ですから、生き埋めになった父をはじめ防空壕に避難した人たちを、工場にいた他の人たちが手作業で掘り起こしたとのこと、時間が掛かったことでしょう。母が駆けつけた時の父の体はまだ温かく、ガラスが飛び散った眼鏡をかけていたとのこと。下敷きになった人たちを掘り起こしている最中にも、第2波、第3波と続いて編隊を組んだ敵の襲来が、やって来たと聞いております。

（株）日立航空機立川工場が初めて空襲を受けたのが、昭和20年2月17日。

その日、爆撃の音が聞こえる中、母は気丈にも私を負ぶって、工場を爆撃する艦載機の編隊を社宅の縁側で見ついたらと話していました。

理由は、庭先に掘った穴の防空壕は、「蓋の様な戸（トタン板1枚）を被せたもので役に立たないから入らなくてもいいと思った。」と聞きました。それ程に粗末な防空壕とのこと、0才児の私を背中に負ぶっての防空壕避難よりもここにいらっしゃる方がマシと思ったらしい。

工場は、3回目の被爆（昭和20年4月24日）で、壊滅したとのことでした。

都立南公園内の戦災建造物「旧日立航空機(株)変電所」は、平成7年10月1日に東大和市の指定文化財となりました。

戦争の爪痕は誰もが知るところです。

ここには、この変電所の空爆で亡くなられた方110名の名前が刻まれた慰霊碑があります。

この変電所の東側に建っている慰霊碑に、自分の父をはじめ友人のお姉さん、他にも知人の名前などが刻まれます。戦争が終わり平和になった近年ですが、ウクライナやイスラエルの戦争の様子をTV等で知るたびに悲しみと、平和の尊さを忘れてはならないことを痛感します。

この慰霊碑は、古戦場となっていた小松ゼノア柵の一角に建立されていました。「慰霊碑建立委員会」を小松ゼノア立川OBの方々が立ち上げ、募金を呼びかけての建立となりました。

戦後50年の節目とし平成7年4月、ゼノアによって慰霊碑の除幕式と慰霊祭が執り行われその式典に、母（80歳）と私（51歳）で揃って出席したことを覚えています。

小松ゼノア（株）が川越へ移転の時（平成12年）、慰霊碑は今の変電所の脇に移籍されました。今では花壇となり、四季折々の花がボランテイヤ仲間たちの手によって咲き、訪れて来る人が楽しんでくれます。碑は、移籍された頃は目立たない存在でした。変電所に隣接したモニュメントのある地、この周辺は荒れ果て、花が咲いている場所ではなく、この慰霊碑に目を止める方も少なく思えました。

平和への恩返しと言うわけではないですが、公園を訪れる人々に、ここにあるよ、ここにいるよと存在を知って貰

いたい思いで、20年程前になります。都立公園勤務を退職された方と一緒に、土の改良から始めました。コンクリートの様に硬い地面は大変でした。ボランテアの方数人と立川の鯉節店で商品化（削り節）後の残粉や骨粗を頂き、敷き込む。各々が持ち寄った花を植え、種を取り、それを繰り返す。4〜5年は、いやそれ以上掛ったように思えますが年月を重ねるごとに花壇らしくなり、変電所の花壇の存在も確立しました。

ちなみに、この花壇の名前「花葉心雑草の会」、私が名付け親ですが、読めますでしょうか？

平和への恩返しというわけではないですが、亡くなられた方々の安らぎの場であって欲しい一念と、ここに来る人

が穏やかになれることを願って「かようこころざっそうの
会」と名付けました。

今は亡き夫とその両親に捧げる戦争体験記

河野 八恵子（七十九歳）

今年、令和七年一月十九日主人が、他界しました。九十才でした。昭和八年三月二十九日生まれの主人は、我々戦後世代が、想像を絶する体験をしたようです。

若い頃から世のため人のため、人のやらない、やれないことをやる。を目標に生きていました。

定年後、二十年、八十才迄は、埼玉県のお茶やさつま芋の栽培、収穫の様子を毎日のよう元気に通い、写真撮影をし、貴重な記録を残しました。百冊以上あります。またもう一つの趣味である、ロシア民話の翻訳など多くの宝物を

残してくれました。

その中の一つに「これからやるべき仕事は戦争体験を書くこと」とあったのです。

それまで私達家族は、本人の人生の中で、やり残すことなく終焉できていたのだと思い込んでいたのですが、そうではなかったのです。

この度、市の広報で、戦争体験記の募集を知り、六十年近く連れ添った私が、主人から聞いてきた話や主人のメモを基に考察し、執筆することに致しました。

今から八十数年前、第二次世界大戦が、勃発してしまいました。

そのため品川区三ツ木小学校五年生、十一才の時、強制

疎開に遭う。一回目の疎開です。

疎開とは、地域の人口や建物を分散し、被害を少なくするために、国が命令を下す。

突然、今まで住んでいた家を壊されるのを家族全員棒立ちになって眺めていた。

住む家を失い、仕方なく、一番上の姉の嫁ぎ先である浅草区三筋町に家を借り、家族八人で住むことになる。

小学校は、浅草から品川迄通うことになった。

小学校六年生四月 今度は、二回目の疎開、学童疎開である。

戦況が、悪くなり、将来の兵隊と銃後を担うべく小学校四年生以上の学童が、親元を、離れ、集団で移動した。

軽便という汽車に乗り品川から東秋留（現あきるの市）に男女別々のお寺に寝泊まりしながら、毎日共に生活する。学校でするような勉強は、ほとんどせず、近くの山へ栗拾いに、夜は、数人ずつ近隣の家のお風呂をもらい湯させてもらった。

二つ下の四年生の妹も学童疎開を経験した。

戦争当時一番上の兄十八才は、特攻隊へ、その下の兄十歳は、軍需工場へ、一番下の八才の弟は、新潟県の新類に託された。

両親と二番目の姉十六才は、浅草にそのまま残っていたが、家族は、分断され、それぞれ違った環境で暮らさざるを得なくなってしまう。

昭和二十年三月六日 小学校卒業のため、学童疎開から
浅草に戻る。

昭和二十年三月十日 東京大空襲に見舞われる。この日
は、陸軍記念日であった。

「風上に向かって逃げる」と突然父親が、大声で叫んだ。
学童疎開から戻って日が浅く、防災訓練の経験もなく混乱
し、見よう見まねで、フトンを水に濡らして頭から被り、
無我無中で秋葉原方面に、市電（昔は東京市）の線路伝いに
走った。

気が付くとはだしだった。

風上の勢いが強く猛威を振り、火に向かって突破するの
は恐しく勇気が必要だった。

しかし、父親は、連日連夜の空襲の被害の状況を把握し、風上の先は、すでに燃える物がなく、風下よりも風上の方が、生命の危険が少ないと判断し苦渋の決断を下していたのである。

地獄図のような火の海、行き交う人々で、ごった返し、風下に逃げた多くの老若男女の背中の荷物に火が点き、熱さに耐え切れずに隅田川に飛び込んで生命を失ってしまった。

十万人もの犠牲者が、出てしまった。

避難していた小学校に、親類が心配し駆けつけ、浅草の姉の家族と共に、母親の故郷である新潟県小千谷市の知人宅に、縁故疎開することになる。これが、三度目の疎開で

ある。

八十年前の雪国新潟県小千谷市は、近年より寒さが、厳しく雪が一階の屋根の上より高く積もっていた。

四里、約十二キロメートルの雪道を草履で中学校に通うようになるが、凍てつく寒さに絶えられず、通学途中の民家に助けを求め暖をとらせてもらうこともあったが、学校は、休みがちだった。

春になり、雪も融け、暖かくなり、疎開先の子供達と野山で遊び、庭先のイチゴを摘んだり、野鳥のたまごや、ヘビ、カエルを焼いて食べた。美味しかったと言っていました。

母親が、農家の手伝いをし、米や野菜をもらってきて雑炊をよく作ってくれたが、いつもお腹が空いていた。

故郷の知人宅のはなれを借り、遠慮しながらも家族にも常に気配りし、農作業で疲れて果てていたであろう母親は、愚痴一つこぼさず、忍耐と努力で困窮を極めた四年間を、どうにか飢えを凌ぐことに頑張り、家族の生命を守る責任を果たした。

この話しを主人からよく聞き思い出す度に、頭が下がる思いでいっぱいになります。

昭和二十年八月十五日 敗戦となる。

主人は、絶対終戦とは、言いませんでした。

戦後の混乱の中、東京には戻ることは許可が出ず横浜に移り住み、家族全員働ける者が、お金を出し合い、家賃を払いながら少しずつ日常の生活を取り戻していくことが

できた。

一方、引越先の横浜の近所の同年代が、すでに勉学に励んでいるのを目の当たりにし、焦りを感じた。

敗戦後当時は、仕事はなく、ただでも雇ってもらえず、探すのは、大変であったが、仕事と勉強が、両立できる夜学を選び学んだ。

少ない給金を貯め月に一度、恵まれない子供達の施設に立ち寄り、鉛筆やノート等の学用品をプレゼントし励ましたこともあった。

横浜の家の近くにカメラ屋があり、通りすがりにいつも眺めていた。

衣食断って礼節を知る。腹八分目を心掛け子供四人兄弟

姉妹仲良く、自分勝手やわがままを許さず、他人様の恩は、忘れず感謝する。

時には、徳のある人だと褒められ、生き抜いた九十一年間でした。

近頃私は、主人は、生き仏だったと、思うようになりました。お父さん、ありがとう。

老後は、六人の孫に恵まれ、二千年の年に「やる気で思考 本気で決断 勇気で実行 三気の心を胸に持て」「富が無くとも今が有る（今とは時、金なり）充実あれば、それが豊かさ 天よ！今をありがとう」という別紙のメモを残していました。

因みに、主人の座右の書は、世界三大文豪の一人、ロシ

ア
の
ト
ル
ス
ト
イ
の
名
作
民
話
「
人
は
な
ぜ
生
き
る
の
か
」
で
し
た
。

防空壕での魂しいの食べ物「くわの実」

友利 巖（八十三歳）

僕は、沖縄宮古島で3才で終戦を迎えた。出生して3才の時であった。当時は空襲の知らせで防空壕に避難した。約3ヶ月だそうです。その防空壕生活で私が蚊にさされて当時の伝染病「デング熱」マラリヤにかかってしまった。当時は、戦時中で薬も病院もなく、食糧難でもあった。そこで私の両親は防空壕で蚊の退治に苦労したらしい。私は生きるか死ぬかの瀬戸際までできていた。そこで母方の祖母が道端にある「くわの実」をもぎ取って僕に食べさせたそうです。それが元で病が次第に回復して元氣を取り戻し

た。それで今では「くわの実」を医者いらずと思ったり魂
しいの実と思っている。僕が今日まで生きて楽しみにして
いるのは、沖縄の三線教室で沖縄の民謡等を歌う事である。
それも「くわの実」のお陰で「くわの実」バンザイである。
今年ももう少しで「くわの実」の季節がやってくる。楽し
みにしている今日この頃です。くわの実よタンデーガーダ
ンデー。沖縄県宮古島の言葉でありがとうございましたの
意味です。以上。

東京大空襲

日野 テル（九十二歳）

東京大空襲のサイレンが鳴り、父の掘った防空壕に逃げました。その時家に焼夷弾が落ち、中から火の塊が10個位出て家の中に燃え移りました。私は皆が止めましたが、私の大事なものがあり家の中に入りました。目の前を、着物に火がついている女の人が「助けて」と言っていました。皆声だけかけて助けてあげられませんでした。

家が焼け、父が休みの時に畳を上げて穴を掘り、母の着物等色々埋めていたもので当時物々交換といって農家へ行き米とか野菜を交換していたようです。

色々なありますが、沢山の事や思いがあり書ききれません。
平和な時代が続きますようお願いします。

小学生の作文

戦争や平和について聞いたこと、知ったこと、
思うこと

戦争について思うこと

青柳 奈々未

私は、戦争について思ったことが三つあります。

一つ目は、戦争はとてもおそろしいということです。なぜなら七分の間で日立航空機立川工場の人々が七十八人も命を落としたからです。一つしかない命が戦争によってうばわれたことがとても悲しいと思います。それに日立航空機立川工場の人々だけで七十八人も命がうばわれてしまい、とても戦争は、おそろしいものなんだと感じました。

二つ目は、戦争は、二度としてはならないものだと思

ました。なぜなら、かけがえのない命を戦争によつてうばわれその人の家族や親せき、友達がどう思うか考えたからです。もちろん本人も辛い思いをしますが、身近な人にとても悲しむと思いました。なので、戦争は、本人も身近な人も苦しめるので絶対に二度としてはいけないと思いました。

三つ目は、今、日本では、戦争がなくて平和にくらせているということです。私は戦争について知り、本当に今は幸せだと実感しました。ですが、残念ながら他国では戦争が起こっています。昔の日本の戦争のように、他国では今、苦しんでいる人がいます。私はそのために戦争についてよく知っておくことが大切だと思いました。

このように私は、戦争について思うことが三つあります。
このことを活かして戦争についてこれからもよく知識を
高めていきたいと思いました。

戦争について思うこと

秋山 実咲

私は「沈黙の証言者」という動画を見て、戦争は絶対にあつてはいけないものだと思えました。動画を見て、たった七分間の間にたくさんの方が亡くなってしまったことにおどろきました。七分という短い間でたくさんの方が亡くなってしまったということから、私は戦争はとてもおそろしいことだと感じました。また、防空ごうの中に入っているだけでも爆だんが落ちてきたという話から、爆だんのい力を感じました。

そして私は、戦争のおそろしさを後世に残して伝えてい

くことが大切だと思いました。なぜなら、私は動画や証言を見て戦争のおそろしさをより深く学んだからです。形で見ただけだと少し戦争について分かったけど、実際に戦争を体験した人の証言を合わせると戦争についてあまり知らない人でもより深く学ぶことができるし、忘れないと思ったからです。他にも戦争の被害を受けたところはあるが、住んでいる町に戦争を実際に見ることができるとしても貴重だと思おうので、大切にしていきたいです。

「沈黙の証言者」

浅葉 幸孝

僕は沈黙の証言者を見て思ったことが三個あります。

一つ目は、経験者の話です。いろんな人が喋って全員思
いだしたくないのだと思います。また、おばあさんが言っ
ていた。「友達が目の前で死んでしまった。」のように僕は、
もし目の前で友達が死んだら悲しいのでとても辛かった
と思います。その時間が休みだった人はとてもラッキーで
すがその場にいた人は悲しく辛かったと思います。

二つ目は、変電所です。動画で見た空襲を受ける前の変
電所と今の変電所では全然違うのでびっくりしました。お

じいさんが「入口がどこかわからない」と言っていたように入口がわかんないほど襲撃を受けたと思うととても怖いです。

三つ目は、二回目の襲撃です。B二十九での爆発で大きな工場がなくなるほどなのです。すごい範囲が被害を受けたと思います。また、戦争をしても人が死ぬだけなので戦争をやる必要は絶対はないと思います。

昔のように戦争が続くような世界にはならないでほしいです。

戦争という争い

新井 あまね

私は、戦争に関する映像を通して、戦争は二度と起こしてはならないようなことなのだと思えて考えた。

東大和市での一回目の空襲では、約七分間で七十八名もの命が消えてしまった。学校でもたまたまに争いごとは起きるが、七分以上たつても命をうばわれるようなことも、建物がこわれるようなことはない。だが、戦争という国同士の争いでは、短時間で人々から沢山のものをうばい合ってしまうのである。そして、その争いが終わっても、勝敗に関わらず、人々に悪影響を及ぼすのだ。

そのため、私は戦争は二度と起こしてはならないと考えている。これからは戦争のことについて私も調べ、考えることでこの国で戦争がおきたことや戦争がおそろしいものであるということを、自分の心に刻んでいきたいと思っている。

沈黙の証言者を見て

飯沼 美百合

私は動画を見て思ったことが三つあります。

一つ目はここで起きた空襲、戦争がこんなにひどいと思わなかったということです。なぜなら、旧日立変電所に実際に入るより実際の証言者に聞いた映像を見て少しでもあったことが知れたからです。特に印象に残った証言は真面目に中に入ってたら爆弾に巻き込まれていたという女性の方の証言です。

思ったこと二つ目はちょうど休んでいる人と休んでいない人がいたという証言で、私は少し考えて、もし工場に

働いている人やその近くで働いている多くの人がいたら百十一人の何倍もの人がなくなっていたかもしれないという事です。それを考えると少し怖くなりました。また爆弾でとても広かった工場があったのに崩れたり壊れたりしてしまつて南公園にあるコンクリートの工場だけになつてしまつていて、爆弾の威力がとても大きかつたという事がとても分かりました。

三つ目はここで戦争があつたことがずつと忘れられないように南公園にある変電所がずつとなくなならないことです。なぜならもし戦争があつたことを忘れてしまつたらまた同じことを繰り返すかもしれないからです。この学習をして改めて私は戦争をやつてはいけなないと思ひました。

戦争と世界の子どもたち

岩橋 菜南

みなさんは、戦争中の子どもたちの思いや生活を想像したことがありますか？ 私たちは当たり前のように食べ物を食べたり、外に出て運動したりしていますが、戦争中の子どもたちは、そのようなことができたのでしょうか？ 図書館の本や、インターネットで調べてみて分かったことは、都心部に住む子どもたちは、学童疎開により、親元をはなれ、食料不足や悪い衛生状態の中集団生活を行い、学校では今の様な勉強だけでなく、戦争のための教育や訓練をうけていたということです。疎開先では身近な物を使った手

製の野球道具やあやとり、戦争ごっこなどが遊びの主流だったようです。

また、祖母から聞いた話によると、戦後でもお米などは家族の人数で配給されており、食べ物も自由には手に入れない時代だったそうです。

以上のことと、今の戦争していないこの日本で毎日を生きる私たちの生活があまりにもちがうことに衝撃をうけたと同時に、一度と戦争を起さないと、何ができるかを考え、行動しなければならぬと思いました。

そのためには子どもたち一人一人が戦争のことを知り、国どうしに争いごとが起きた際には、戦争以外の方法で解決できる平和な世界を築いていくべきだと私は考えます。

今この瞬間にも戦争で苦しみ生きることが精一杯な子どもたちが世界にいます。

みんなが希望をもって学校へ行き勉強をし、平和な毎日が当たり前の日常になることを願います。

今の私たちにできることは、戦争のおそろしさを「忘れない」ことと「伝え続ける」ことであり、そうすれば世界中に平和がおとずれる日がくると信じて毎日を大切に過ごしていきたいです。

戦争は不幸のかたまり

王 美月

この「沈黙の証言者」を見て、最初に思ったことは戦争の怖さです。たった七分間もの間でも七十八人の命がうばわれ、防空ごうの中に入っても爆弾がとんできて亡くなつてしまった人たちも入れば逃げている最中に爆げきされて死んだ人もいます。しかも、この空しゅうは三回もあり従業員やその家族など何の罪のない人々があわせて百十も亡くなりました。また、建物はあとかたもなく消え去ったり、鉄骨だけになったりしました。しかし、奇跡的に残った変電所が今もなおたっており戦争の恐ろしさと

ともに二度とこのようなことがおこらないようにという
メッセージを伝えていきます。

私は、戦争というのにいいことは一つもないと思います。
たくさんの人が犠牲になった勝利には何の価値もなく、た
だ人の苦しみと悲しみがのこるだけです。だから、この変
電所がいつか戦争がなくなるその日まで残ってほしいと
思います。

戦争のこわさ

大久保 彩恵

工場で働いているときにばくだんが2回も落とされたくさんの命がなくなりました。私は2回落とされたことを知りませんでした。写真では今の変電所とはとてもちがいました。どれが変電所なのか分かりませんでした。たて物がほとんどなくなっていました。でも変電所はあったけどボロボロになっていました。私は戦争であつた話を聞いてどの人も「こわかった」などと言っていました。私は戦争でたくさんの命がなくなり、多くの建物がなくなつたことを知りました。私は戦争のことを知らない人に戦争のおそ

ろしさやたいへんさを教えていきたいと思ひます。戦争のおそろしさを知らない人がいないようにしたいです。そうすれば戦争は起こらないと思ひます。戦争が二度とないようにしたいです。

戦争についての感想

小野 琴巳

戦争で多くの人の命がうばわれたと知り、戦争はこわいなと思いました。仲間が死んでしまったと思うと、悲しいとも思うし、それ以上の思いもうまれます。

なくなっている人が百人以上もいると思うと六年生全員よりも多いんだなと思うし、とてもこわくておそろしいとも思いました。

戦争のことをあまり考えていなかったけれど、この動画を見て、あらためて、戦争のこわさを知り、戦争はもう二度とやってはいけないことだと思いました。

『沈黙の証言者』を見て思ったこと」

加納 愛菜

私は、「沈黙の証言者」を見て、戦争は絶対にしてはいけないと改めて思いました。

私のおばあちゃんは戦争を経験しています。私は、たまたまにおばあちゃんから戦争があった時のことを聞いていました。私はおばあちゃんの話や戦争のお話、ビデオを見て戦争がどんなに大変で、どんなにつらかったか想像したことがあります。空襲警報が鳴り、爆弾が落ちてきて、大勢の人が亡くなり、大変だっただろうなと思います。

ですが、変電所だけはその戦争に耐え抜き、今も東大和

市の南公園にあり、「戦争は絶対にしてはいけない」ということを表しています。私は南公園を通ると変電所を見かけるのですが、戦争に耐え抜いた変電所は、私たちに、戦争は二度としてはいけないということを伝えるために耐え抜いたのではないかと思いました。

私は戦争を経験していないから戦争の痛みや、苦しみ、恐怖、悲しみは想像することはできても、実際には分かりません。ですが、変電所を見るとその辛さが少し分かるような気がします。

私は、先ほども言った通り、戦争を経験していません。ですが、戦争を経験していないからこそ、戦争は二度としないしてほしい、してはいけないと思っています。

「平和」と「戦争」

川内 紅明

私は戦争はただただ尊い命が失われるだけだと思う。そして平和は意外とすぐ近くにあるものだと思う。

戦争は国と国との争いだ、いつも通りに暮らしている人の尊き命でさえ奪う、その人達がなにか大罪を犯したか？何か悪いことをしたか？いや、してない彼らはいつも通り、仕事をし、学校に行き、遊び、笑う、これらは誰もがしていいことだ、彼らの尊き命を奪うという行為は絶対にしてはいけない、絶対に。

平和は意外と気づかない。毎日ご飯が食べれて、いつも

帰れる所がある。毎日学校、仕事に行ける、それって結構、
幸せで平和だと思う。この幸せは戦争が終わったからある
ものでいまも戦争をしていたら、ご飯はおなか一杯食べれ
ないし、学校や仕事にも行けない、でもいまは違う毎日お
なか一杯食べれて、学校にも行ける。私はそんな平和を毎
日かみしめたい。

このように私は戦争は尊き命を失うだけのもの、平和は
意外と近くにあるものだと思ってきました。

「沈黙の証言者」を見て思ったこと

川久保 悠

「沈黙の証言者」を見て、印象に残った事を紹介します。
一つ目は、短い間の攻撃でたくさんの方が命が失われたという事です。本田さんは「運が良かった。変電所がやられた」ということは聞いていたが、次の日行ったらめっちゃくちゃだった。」と話していました。失われた人たちは変電所の横のお墓のようなところに名前が書いてあるそうです。

二つ目は、ぼろぼろになった変電所です。あんなにぼろぼろになっているという事は、とてつもない攻撃があっ

たんだとわかりました。しかし、奇跡的にぼろぼろになっても残ってくれたおかげで、未来に戦争の恐ろしさや、平和の大切さ、を教えてくれるものだと考えています。

僕が年をとったら、平和の重要さを今の自分たちのような若い人たちに伝えていきたいです。

「沈黙の証言者」を見て

岸 花凜

わたしは、「沈黙の証言者」を見て改めて戦争は二度と起こつてはいけないことだと思いました。なぜそう思ったのかというと、わたしは戦争があつた時代には生まれていませんでした。そして戦争のこわさも知りませんでした。でもこのような「沈黙の証言者」を見てどうして尊い命までうばわれなれないといけないのかと考えることでとても心がいたみました。また、いっしょに生きてきた仲間の気持ちまで考えるとさらに心がいたみます。でも、この変電所を私たちが守り続けることで同じような戦争がくり返さ

ないように私たちが大事に守り続けていかなければいけないと共にまた同じようなことをくり返さないために私
たちも協力する必要があると思います。

戦争という出来事

久保 柁二

ぼくは、戦争は必ずしたくないと思っっている。これから理由を3つお話しします。

一つ目、その時実さいにいた人からのお話で「こわかった」ということばを聞いて絶対にしたくないと思った。

二つ目、東大和市の変電所が戦争でくらったこうげきでたくさんの傷や穴ができていてこんなにもひどいこうげきや被害がうけるのでおそろしいなと思った。

最後に三つ目は、お亡くなりになられた方々の人数です。七十六人という人々がお亡くなりになられて1回のこう

げきでも七十六人がいなくなりました。

このことでわかることは戦争はこわくて物がこわれて人がお亡くなりになって悲しいことしかないので戦争は必ずしたくないです。これがぼくの戦争をしたくない理由です。

戦争の映像を通して

腰塚 陽太

私は、この戦争に関する映像や、戦争を経験した人達の証言をふまえ、戦争が起こりうる事、国同士が争うようなことを徐々に減らしていくことが大事だと改めて考える。

私は戦争の映像の証言を聞いて、私は戦争のおそろしさが一段と上がった。証言では、「どこが自分の場所かわからなかった。」や「友人が亡くなった。」などがあり、今一度きようふを覚えた。それに記録によると、東大和ではたった七分間の爆撃で七十八人も尊い命がうばわれ、周りを火の海にした。戦争は七分という少ない時間でも、人

が苦しみ亡くなっていく国同士の無責任な争いなのだ
と私は改めて感じた。

そのため、私は戦争について調べ、周りに知ってもらい、
戦争がどれだけ人を苦しめていくのかを学び、戦争になる
ようなことをなくしていきたいと私は考える。

戦争について思ったこと

小島 源司

ぼくが戦争について思ったこと、感じたことは、変電所でもともと働いてた人たちのお話で、この人たちもすごくざんこくないやな気もちがあつて、本当に戦争をするのはよくないと思ひました。

空襲警報の音はもう二度と聞きたくないと思ひました。戦争はいいことがひとつもないし、やって意味もないのになんでするのかがきもんだし、それで人の命までうぼうのは本当によくないと思ひました。なので次は戦争がおこらないことを心からねがいます。

戦争を経験したいろんな人も、あのいやな気持ちを思い出させたくないです。

戦争について思ったこと

後藤 夏海

私は戦争は二度とやってはいけないと思いました。戦争は関係のない人までまき込まれて、多くの人の命がうばわれてしまうからです。

私は東大和市にある変電所に実際には入ったことがありません。変電所内では戦争のことについて書いてある文や、使った道具が展示されていて、実際に変電所内を見てまわることになりました。変電所の外側は的のこうげきでところどころ穴があいていたりくずれていたりしていました。私はいずれ、戦争にかかわった人たちが寿命で亡くなっ

まいります。なのでその人たちの話を聞いた人や動画を見た私たちが戦争のおそろしさをこうせいにつなげていく必要もあります。

だからこれからは戦争のおそろしさをこれから生まれてくる人々に伝えることが大切になります。また私たちの説明だけでは分からない人や理解しにくい人々もいると思います。そのために変電所や戦争にかかわった建物や道具などを残しておくことで新たに生まれてくる人々に理解してもらえ、二度と戦争をやってはいけないと伝えられると思います。

沈黙の証言者を見て

佐々木 陽香

私は、この動画を見て思った事が二つあります。

一つ目は兵器についてです。戦車や爆だん、じゅうなどがあります。がどれも人を傷つけるものだと思えます。そんな兵器が無ければなにもしていない人が傷つけられたりしないと思えます。

二つ目は戦争についてです。私は戦争は、けんかのようなものだと思えます。ただ、そのけんかになにもしていない人をまきこむのはおかしいと思えます。しかも、たくさんの人の命をうばったり、建物をこわしたりして戦争をし

てもだれも得はしないし、むしろたくさんの人に損をさせていると思います。トラウマになったり、こわい思いをしたり、家族を失ったり、良い事は何一つ無いと思います。戦争は、国と国の自分勝手な争いで、やってはいけない事だと思えます。

沈黙の証言者を見て

眞田 萌依

わたしは、「沈黙の証言者」を見てわたしは経験をしたことがないけれど、被害にあった変電所や建物を残して色々な世代に伝えているんだなと思いました。

そして、実際に戦争を経験した方のお話を聞いてみると、どれだけ爆弾という物がおそろしいのか、どれだけ大変だったのかが知ることができました。

戦争は最悪なことで絶対に起きてはいけないことなんだなとあらためて実感しました。

日本で起きた戦争なので絶対に忘れられないことがない

ように伝えていきたいと思いました。

そして、もし戦争を経験することがあっても落ち着いて行動して、命を守ってしっかり行動したいです。

戦争と平和

澤田 唯花

私と戦争、それは遠く離れたものだと思っていた。戦争体験記録「沈黙の証言者」を視聴し、私の住んでいる町「東大和市」が戦場だったと知った。私と戦争は近いものだったことに気が付いた。

「旧日立航空機株式会社変電所」このたった一つの建物が戦争のことを色々な人に知ってもらうために残されている。

戦争はただの国同士の争いではなく、多くの人が亡くなってしまふ怖いものだと思った。いつ爆弾が落ちてくる

か分からないため、私のように明るくて楽しい毎日を送ることができなかつたのだと思う。戦争が始まると、住む場所を襲われたり、学校に行けなくなったり、大切な家族と離ればなれになってしまうこともある。戦争は命だけではなく、学力も居場所も奪うものなのです。戦争はあつてはならないことだと改めて感じた。

生きていること、日本が戦争をしていない時代に生まれたことに幸せを感じ、これからも日本の平和、そして、地球から戦争が無くなることを強く願う。

「戦争をしてはいけない」

篠田 玲那

学校で被爆した人の映像を見て、たった一回の原爆で百十一人もの人が犠牲になったことを知り、戦争は絶対にしてはいけないなと思いました。

変電所で働いていた人の話を聞き、変電所の中にいた人や変電所の近くにいた全く無関係の人が犠牲になり世界は平和とは言えないと思いました。

映像を見た後に私は、変電所の中に行きました。

そこには大きな木みたいなのが何個もあるような写真がありました。でもよく見ると、原爆が爆発している写真

でした。一度に沢山の場所で原爆が爆発してきつとその場にいた人は、凄く怖かったんだと思います。

昔は日本もたくさん戦争をしていました。しかし今は日本は「もう戦争はしない」と決め争いがなくなり、平和な世界になるんだと思います。

平和と戦争

清水 えみり

私は、これからも戦争を二度としてはいけないと思いました。なぜなら、戦争は私にとって恐ろしいものだからです。

戦争をしてしまうと、多くの人々の命がなくなってしまふからです。なくなつた命はもどってきません。

他に、大切な家族や、友達を失ふことになつてしまふです。

また、大切なものや住む場所がなくなつたり、大切な食べ物が入らなくなり生活するのが難しくなつてしま

います。

戦争をしないためには、過去の戦争の事を思い出し、絶対に争いごとしないと、全員が強い意志を持つことが大切です。みぢかな小さな争い事やけんかをする事で大きな事件につながります。その、小さな争いごとやけんかを防いで小さな平和を作っていく事、大切だと思いました。

そして、今ここにある平和を大切にしていき戦争を絶対にしてはいけないという強い意志をもって生活をしていこうと思います。

戦争のおそろしさ

菅谷 麻莉

戦争を経験した人の話を聞いて私は戦争のこわさを知りました。

私は戦争を経験したことないから戦争がひさんだったことなどあまり実感していなかったけど当時の人の話を聞いて、戦争はとてもおそろしかったんだなと、実感しました。

変電所にも無数のばくだんのあとがあつてとてもおそろしく感じました。

食料やね所も満たない所でばくだんも落ちて今じやと

でも考えられない光景にとても、びっくりしました。

そして7分という短い間にも尊い命が亡くなって戦争のひさんさを改めて実感しました。

戦争を経験している人が今、生きているのは本当にすごいことなんだなと思いました。

日本は戦争をしないとさえも、いい国だなと思いました。

変電所の伝えたいこと

鈴木 凜音

私は、沈黙の証言者を見て、改めて戦争をしてはいけな
いと感じました。爆撃をうけた人の体験談はみなさん同じ
ようなことをはなしていました。それはとてもつらいこと
をいっていました。

実際、変電所に行ったことがあります。その姿はとても
悲惨な姿でした。なかにもはいったことがあります。いろ
いろな展示物がかざってありました。二階にあがるとさら
におそろしいものが展示されていました。

私は、この変電所をみて、戦争は怖いもので、絶対に戦

争をやっつてはいけないものだとおもっていました。しかし、今回の沈黙の証言者という動画をみて、改めて戦争をしてはいけないと思いました。さらに、戦争を実際に経験した人はまだ多くいるということが分かりました。

最近では戦争をまだやっている地域もあります。私は、戦争がなくなるように、願っています。

「戦争をしては絶対にだめ」

瀬尾 綾乃

私は、沈黙の証言者を見て、戦争をしては絶対にだめと感じました。被害にあった人の話を聞くと、自分もそんな被害を受けたら、恐怖だと思ったからです。

南公園にある、変電所の中に入ると空襲のあとがとんでもなかったです。外から見ると、壁にでこぼこがたくさんありました。このことから、たくさん空襲が来たことが分かりました。

沈黙の証言者では、空襲では百十一人もなくなつたと言っていました。何も悪いことをしていない人が犠牲にな

るのはとてもかわいそうです。自分がその百十一人の中に私の家族が入っていたら、とても悲しいです。空襲を打つた人たちは犠牲になった人の気持ちを考えてないのか？と感じました。

改めて、戦争は絶対にしてはだめと感じます。日本だけではなく、全世界の国民が戦争をしないでほしいです。戦争はとても恐ろしいと、全世界の国民に知ってもらいたいです。そして、戦争がいつかなくなることを私は願っています。

「戦争と平和」

田井 桜子

私は、これからも戦争は絶対にしてはいけない。そして今ある平和をずっと大切にしていきたいと、私は思っています。なぜなら私は、戦争のことをとても恐ろしく、行つてはいけないと思っっているからです。これには理由があります。

理由は、人の大切な命がなくなってしまうからです。人の命は一度きりです。一度なくなってしまうともう元に戻りません。そんな大切な人の命を人の手で、なくしてしまふなんて殺人犯と同じようなものと私は思っています。そ

れに、ただの一般人も一緒に殺害してしまうなんて質の悪いことだと思っっているからです。

これは私が思っていることですが、お互いに被害が及ぶとも思っています。お互いに建てられた建物や文化遺産として残され続けていたものが、たった一回の戦争で亡くなってしまいかもしれない。たった一回の爆撃で復旧するのがとても困難になってしまいかもしれないといったことになるかもしれない。これはお互いにとってとても大変になってしまいうことです。このような被害をなくすためにも戦争は行わないほうがいいと思います。

私は、戦争をやる意味はないと思っています。今、戦争をしている「ウクライナ」と「ロシア連邦」の戦争が一秒

でも早く終わることを願っています。そして、戦争のない、
平和な世界が来るのを私は待っています。

戦争について思うこと

田邊 朔也

ぼくは、戦争について思うことが2つあります。

一つ目はDVDの「沈黙の証言者」をみて思ったことです。7分で外はぐちゃぐちゃになって人はたくさん死んでしまいました。ぼくは、そんな7分間は、たえられないと思います。

二つ目は戦争をしてなんの得になるのかなと思ったからです。

ぼくは戦争のことは初めただの国と国のけんかかと思っ
ていませんでした。

DVDを見て、戦争は本当にしてはいけない、みんなをまきこむものだと思いました。近くにいま戦争にあった変電所があります。ぼくは変電所に行つて戦争は絶対にしてはいけないと思いました。

旧日立航空機株式会社変電所について

思ったこと、感じたこと

富永 優季

太平洋戦争末期になると軍需工場が集中していた多摩地域は、数多くの空襲を受けました。旧日立航空機株式会社変電所でも3回の攻撃を受け、工場で働いていた人や周辺の住民など、1000人を超える方々が亡くなったそうです。この空襲で変電所は8割方壊滅したといわれています。壁には銃や爆弾によってたくさんのクレーター状の穴ができましたが、鉄筋コンクリート製の建物は致命的な損傷を受けませんでした。

この変電所を含む工場の敷地は、都立公園として整備されることになりました。変電所は取り壊される予定でしたが、地域住民や元従業員の方々の保存運動が実を結び、建物はそのままの場所で保存されることになったそうです。戦争について少しでも考えてほしかったからでしょうか。私は社会の授業で戦争について勉強した時に、初めて変電所のことを知りました。「西の原爆ドーム、東の変電所」と言うそうです。とても激しい戦争だったんだなあと感じました。そして、当時の人たちの暮らしや思いを想像しました。時間をこえて、今の私たちの暮らしにつながっているのだと思います。

旧日立航空機株式会社変電所は東大和市の指定文化財

として、東大和南公園に残されています。目で見ることが
できる変電所があり、今回の機会で戦争について考えるこ
とができました。

今も世界中で戦争は起きています。私はこれからも考え
ていきたいと思えます。

「沈黙の証言者」を見て分かったこと

中澤 千紗都

私は、動画を見て分かったことや、思ったことが二つあります。

一つ目は、戦争は一般人だとしても巻き込まれる可能性があるということ。インタビューしていたひとも、運よく休みだった人ばかりでした。もし仕事場にいたと考えると、すごく恐ろしいことだと思います。

二つ目は、戦災変電所が残されている理由です。今までなぜ残していたのか全く知りませんでした。ですが、動画を見て二度と戦争をおこさないためという深い理由が

あることが知れました。そして、戦争で、唯一残った建物だと聞いてすごく驚きました。

このように、動画を見て改めて戦争は二度と行ってはならないことだと思いました。もしものことを考えると、とても恐ろしいことでいっぱいです。私たちは今、こうして幸せに暮らすことができます。これから先、幸せで健康に暮らせていることに感謝し、生きていこうと思います。

沈黙の証言者を見て

中塚 莉穂

私は「沈黙の証言者」を見て戦争は被ばく者がずっと心からはなれない最悪なことだと思いました。

被ばく者は後き高れい者ばかりなので、今のうちに若い人たちが戦争のことをしっかり学んでいかなければいけないと思いました。

そして、実際に被ばく者にお話を聞くと、「戦争がとてもおそろしく、とても悲しい出来事なんだな。」と思いました。

また、今ロシアとウクライナの戦争が何年も続いています。

おかしいなと思います。どうして早く、終わらせないのか不思議に思います。

戦争はこわく、おそろしく、たくさん命をなくし、たくさん心をこわし、とても最低で二度とあつてはいけな
いと思いました。もつと知っていききたいと思いました。

戦争は、おそろしい物だ

中村 美夜乃

私は、戦争の話を聞いて、戦争は、おそろしく、二度とくり返しては、いけない物だと思い返しました。

なぜかというと、たった七分間の、空襲警報が鳴っている間に、約七十名もの人が命を落してしまい、変電所などの建物も、ばくだんで、こわされていました。

私は、このような話を聞き、とても悲しくなりました。昔、日本は戦争をし、人の命をうばい合っていました。今の日本は、戦争をしないことを、義務付けられたけど他の国は、戦争をくり返し行われ、命を落としてしまった

り、行き場のない人が増えていました。

このような事が、くり返されないためには、人を気づかう気持ちや、行動が大切です。

みなさんは、何が大切だと思いますか。

戦争と平和

難波 ひなた

戦争とはなぜあるのか。戦争はなぜ起こるのだろうか。戦争は物をこわし、人を姿形をなくして殺す。そんなことはあつてはいけない。

戦争がどんなにおそろしいものか分かる。近くにあるものは変電所である。変電所でこぼこぼは、空爆によって起こったものであり、変電所で働いていた人たちも死んでいった。三回による空爆によって、百十一人の尊い命が散つていった。戦争とはおたがい損をし合うみにくい争いである。

逆に平和とはなんだろう。平和は戦争とは真逆で、人々が助け合い仲良くすることである。平和が続けば戦争もないし、いやな思いをすることも無くなる。だが、人によっては都合が良くないこともある。

つまり、戦争は起こりやすく、平和はほぼ起こらないのだ。争いは大切なわけがある。争いは人が生きている中に行きがちがいや、都合など、たくさんのわけが存在する。戦争はおそろしいものだからこそ、無差別に行つてはいけないものだ。

DVDを見て思ったこと

西川 文也

ぼくは7分間の空しゅうで七十八人の命がうばわれて、絶対に戦争はしてはいけないと思いました。変電所があるのもきせきだしぼくたちが今生きているのもきせきなんだなと思いました。でも戦争で生きていた人は、本当すごいと思って自分たちの土地があるのもすごいけど、不思議だと思いました。計百十一人の命がうばわれたと知って、ぶっそうだなと思いました。けど、なぜ戦争をする必要があつて戦争は今までなくなっていないのか、ぎもんになりました。

ぼくはこのDVDを見て戦争はくり返しては、いけないし絶対に日本もゆうしゆうな人間を亡くしたくないと知れたので、これからは親が生きていてくれたことにかん謝して生きていこうと思いました。

戦争について思った二つのこと

野口 琉汰

戦争についてぼくは、思ったことが二つあります。

一つ目は、戦争のおそろしさについてです。まだ一、二年生のころは戦争に関心がありませんでした。ですが五年生ぐらいになって歴史の本をたくさん読むようになったので、戦争について関心が深まり、戦争のおそろしさを改めて知りました。

二つ目はなぜ戦争をするかです。戦争のDVDを見て戦争の被害を受けた人がどんなに苦しかったかと思い知らされました。最初には自分には関係ないと思っていました。

でも、あのとき自分がいたらと思うと、とても怖く感じます。戦争はたがいが正しいと思っただけで、勝ったとしても何も残らないと思います。

戦争はむなしく、悲しいものです。戦争は何かあってもしてはならないのです。

「戦争や平和について思うこと」

橋本 明香里

私は、戦争や平和について思うことがあります。今世界では、ウクライナとロシアで戦争をしています。二つの国での戦争の理由は場所の取り合いでおきました。場所の取り合いで何年も続く戦争になるのは、その国に住んでいる人たちも嫌だと思うし、その国の大統領同士でバチバチしあっているだけなのに、国民が巻き込まれて、国の建物だって壊されてしまいます。大統領二人のけんかで大きな被害が生まれます。それに対して、平和は、国民も大統領も建物も、全部自分たちのやりたいことがたくさんできま

す。例えば、国民が政治などで自分の願いが言えます。大統領は、国民の願いを第一に考え、もつともつと大きな国にすることができません。建物だって戦争がないので壊れたりしないので、キレイに何年もの間残しておくことができます。

世界へ伝えたい

東元 花歩

私は「沈黙の証言者」を見て、これからも戦争はおこなつてはいけないこと、それを今後も戦争はおこなつてはいけないということをおかってもらうために変電所を残すということは大切と思いました。なぜそう思った理由が一つあります。

それは、しょうげきの記憶は自分の心に残るといふことです。戦争がおこるといふことは死者がでるそれを自分が見たらしょうげきの記憶に残ってそれをときどき思い出してそのたびいやな思いをしなければいけない、も

し死者が大切な人だったら夢や毎日思い出して言葉で表現できないほどの思いを感じなければいけないからです。そして戦争をしてはいけないということのを忘れないようにするために、毎日家族や友達と戦争はしてはだめということを話して友達からほかの友達に広がって戦争をしてはだめということを、世界全体に理解してほしいです。

沈黙の証言者

廣瀬 稜介

ぼくは動画を見て日本にいて良かったなーと思います、それはこの国はもう戦争をしないと平和主義という憲法があるからです。ぼくはこういうことにも日本の良さがあると思います。

でもなぜ戦争はいやなのかそれは3つあります。一つ目は、罪のない人がたくさん亡くなってしまつて土地などがなくなつたりし、食料がさきに兵士にまわつていくことで食料不足になつてしまい、怪我人がふえることで病院などが満床になり助からない人がでてくることがあるからで

す。

動画ででていた人のインタビューで「バクダンがこういう落ちる音だった」とおぼえていたのでみんな記憶がありつらかったのかなーと思いました。

ぼくは昔日本でこんなことがあったと思えないのは自分かひがいにあっていないからなので、もっと学べたらいいなと思っています。

沈黙の証言者を見て今、思うこと

藤野 結海

わたしは、「沈黙の証言者」を見て、私が生まれていないころのことだけど、今、ウクライナ、ロシアの戦争のことをもっと、知れたらいいなと思いました。

「沈黙の証言者」を見て、家族含め十一人がなくなってしまうのを見て、戦争は、人を殺す最低なものだと感じました。約七分の時間にも十一人がなくなってしまう七分間だったんだなと思いました。いつもは七分が短いと感じるけれど、戦争をしていた時にはとても長い時間だったかもしれないと思いました。

今、自分がロシアとウクライナの戦争で思ったことは二月二十四日から戦争が始まり、いろいろな人が命を落としているとは知って、もうこんなことは起きてほしくない、これいじょう命を落とす人がいてほしくないと思いました。早くロシアとウクライナの戦争が終わってほしいなと思いました。

わたしは、もう二度と日本、世界での戦争が終わってみんなが、幸せに平和に生きれる世界に早くなってほしいと願っています。

そしてまだ小さい子どもたち、まだ生まれていない人たちにもそういうことがあったんだなと知って思っしてほしいです。

過去の戦争だからこそ

本間 愛花

私たちは本当の戦争のおそろしさを知りません。サイレンの音のこわさは知りません。実感のない過去だからこそよく考える必要があると思います。だから私は今から戦争について考えていこうと思います。

最初の空しゅうの七分間、そのような、なにげない日の七分間、そこで多くの人が亡くなりました。どれだけつらかったか、どれだけの人の死に悲しみ、絶望したかと私は感じました。空とは思えない灰色の空、そのような空を飛ぶあつてはならない戦とう機、それを見た人たちの思いは

実感できないけれど、その思いを感じて寄り添うことは出来ると思います。

過去の戦争はもう無いからと思っではならない忘れてはならないものだと思います。そして当事者の悲しみを全部受け止めて、この場所を、日本を戦争させてならないと思うことが大切だと思う。そして今の平和に感謝するとともにこの平和のけい続があることを私は願います。

空襲

宮澤 遥

私は空襲で多くの人の命がなくなってしまうから空襲はおそろしいものだと思います。たった七分だけなのに多くの人がなくなり、もう一度の空しゅう、なぜ、人の命をねらうのか、どうして人の命が亡くならなければならないのか不思議に思います。でも少しだけ生き残った人がいてよかったが、また同じことは起こしてはいけないということとを伝えるために、東の変電所が伝えてくれているから、この平和が二度となくなつてほしくない、みんなと笑つて、けんかして、はげまし合うなんでもない日々が大切な時間

で、来週も、来月も、来年も、ずっとこの日々が続いていき、ちがう国の人たちも戦争など、尊い命がなくなってしまうことをしないでほしいと私は思います。つまり、戦争や空しゅうで尊き命がなくならないように私たちはいり続けることをやめてはいけない大切なことであると思います。なのでちがう国でも平和で愛があふれたらうれしいと思います。

戦争の悲惨さ

向井 瑞季

僕は、ロシアのウクライナ侵攻が始まってから、今までの戦争についてなど、日本がした、アジア・太平洋戦争や、日清・日露戦争について、本を借りて読んだりしていました。

僕の祖母は、1947年生まれです。そのため、戦争について知っていることや、祖母のお父さんが戦地に行っていたので、聞いたことなどを僕に教えてくれました。祖母のお父さんは兵士に食料を届ける人だったので、一命はとりとめました。ですが、戦地で見た仲間がどんどんとなく

なつていく様子などがすごいショックだったようです。そのため、もう戦争はしてはいけないということを経母から教えてもらいました。

本を読んで分かったことは、米英との関係が悪くなつていたことや、軍部が台頭してきたことなどが分かりました。天皇、首相は戦争をする気はなかったのに、軍部が始めてしまったことを知りました。そして、いい思いをした人は一人もいなかったのです。戦争はする意味がないと思います。国民の不満もたまつていくのばかりなので、誰も喜びません。なので、ロシアのウクライナ侵攻もする意味がないのです。

日本は世界で唯一の被爆国です。しかも、第五福竜丸の

事件もあつたので、原水爆の恐ろしさについて今よりもつと伝えていくべきだと思います。また世界大戦が起きたら、もう取り返しのつかないことになります。地球から人類が滅亡するかもしれません。それこそ、本当の終わりです。世界から人類が滅亡しないために、この平和がずっとずつと続いていくために、人類は二度と戦争をしないようにしなければならず、戦争の怖さ、恐ろしさを後世に伝えていかなければなりません。

沈黙の証言者について

森若 渚々美

「沈黙の証言者」の動画を見て、思ったことが二つあります。一つ目は、変電所の残った形についてです。初めてあの変電所を見たときにあの中に本当に人がいたのかどうかうたがっていて信じていませんでした。けれど機械や物を見て本当にいたのだと分かりました。あそこまでボロボロになっていて、二度と戦争はやってはいけなさと感じました。

二つ目は、戦争のおそろしさについてです。私が戦争の動画を見た時に、あのサイレンを聞くだけで、鳥はだが立

ちました。今でもずっと残っている変電所を見て戦争のおそろしさを町の人々や他の人々にも知ってほしいと思いました。また世界の人たちが苦しい思いをすることなく平和に暮らしてほしいと感じます。

戦争について思った事

矢嶋 優奈

私は、戦争の話で戦争は、すごくこわい事だと思いましたが。たくさんの人の命がなくなる戦争は絶対にしてはいけないと思いました。

私は戦争を経験していませんが戦争はものすごくこわいと思います。空しゅう警報の音はみんなの耳に残るような音、ばくだんがばく発する音、知り合いや家族が戦争で死んでしまう事すべてが安心できなくてこわい思いをすると思います。戦争を経験した人はこわかったと思います。たくさんの人が戦争のせいで死んでしまったため平和

主義があるのだと思いました。

戦争は二度としてはいけないしさせてもいけない。そして何よりもみんなが戦争でたくさん死んでしまったことを知ってほしいです。

戦争の悲しさ

山口 湊太

僕は、「沈黙の証言者」を見て思ったことが三つあります。

一つ目は戦争は嫌だということです。なぜかというところはウクライナ侵攻をロシア連邦がやっているので昔の東大和は今残っている旧日立航空立川工場の戦争でたくさんの人がなくなってしまうました。

二つ目は二度と平和でいることです。なぜかというところは戦争で負けた後に平和主義が日本国憲法に定められてからこの旧日立航空機立川工場は一部の部分が残りま

した。この旧日立航空機立川工場が残っている理由は「二度と戦争をしないように」や「二度と平和でありますように」と込められているかなと僕は思いました。

三つ目は旧日立航空機立川工場が南公園に残っていることです。この工場は戦争でたくさんの人が亡くなってしまうけれど、この旧日立航空機立川工場の一部が永久に残るようにし、僕はこの旧日立航空機立川工場が日本の平和、そして東大和の平和を作っていると思います。また、この旧日立航空機立川工場では僕は戦争を忘れないとずっと思っています。

沈黙の証言者

山路 陽菜咲

私は戦争のDVDを見て、知った事や、思った事を発表します。

戦争が開始した時、たったの七分だけで約75人以上の人々が命を失ったと聞いた時、何万個もばくだんを落とされて、死者がでてしまうのだと思いました。

7分だけで建物もこわれてしまっていたのを見て、こわいとも思ったし、その場にいた人たちも辛いとも思っただろうなと感じました。

また私が家を出ている時も家にいる時も、空襲警報が

鳴ったら、こわくて、動く事もできないと思うし、立ちあがる事も絶対に無理だと感じました。

私はこのDVDを見てもう二度と戦争などを起こさないために、変電所などを残したんだと思いました。

最後に、戦争がどれだけおそろしくてこわいものなのかを実感しました。

沈黙の証言者を見て

山下 暢之

自分が沈黙の証言者を見て思ったことは、実際に空ばくを受けた人にインタビューをしていて、空ばくを受けた人は運が良かったから助かったと言っていて、約百十一人の人が亡くなってしまっていることがわかりました。戦争は血もなみだもない人が起こすもので、ふつうに生きているだけなのに、戦争によって命を落とす人はどう思っているか気になった。戦争といえど、広島にある、原ばくドームも、戦争のきびしさを自分たち、若い世代に伝えていく役目があることがわかりました。そういう建物がなかったら、

この国ほしいが理由で何百万人の人々の命がうばわれる
ようなことは絶対にしてはいけないことだと思いました。
自由がほしいなら、まず平和がないとできないし、やりた
いことがあっても、戦争をやっていたら自由も命もうばわ
れる。と、そんなことはないようにと思いをこめられて、
造られた所だと思いました。

沈黙の証言者を見て

吉田 瑛

ぼくがこの動画を見て一番思ったことは、戦争は何があっても決してやってはいけないことだと思いました。なぜなら、自分の国のために、他の国の人々を平気で殺ろせるなんてありえないと思ったからです。

この前、ぼくはテレビで他の国が戦争をやっているとこの前を見ました。大統領は国をたおすと言っているけれど、住民の人々は、戦争をやめてほしいや、住む国をかえたいなど反対の声が上がっていました。これを見てぼくは、なぜ戦争はおこるのだらうと思いました。五年生の時の授業

で、戦争のことをやったときに、戦争の写真を見た時に、
おどろきました。

これを見て、戦争はなくなっただけでほしいです。

中学生の作文

戦争や平和について聞いたこと、知ったこと、
思うこと

戦争の悲惨さ

葵 美優

私は、戦争体験映像「沈黙の証言者ダイジェスト版」を見た。結局、私たちは映像や体験話しか聞けないんだと思う。だって、私たちは体験していないから。私たちは何も苦しさを知らないから。映像を見て悲しい思いをする私たちだけど、戦争を間近で見ている人たちよりは悲しさは少ないと思う。どこかに行けば人は亡くなっている。私は、怖くて想像ができないもの。そもそも、私は戦争を体験していないから想像すらできないと思う。今ではご飯もあつてねる場所があつておまけにゲームある私たち。これは私

たちにとってあたりまえに存在しているもの。だけど、こ
うやって映像や体験話などの話を聞くとただ悲惨な気持
ちになってくる。あたりまえに存在するものがまるで、あ
たりまえじゃなく感じて「たった一つの戦争でどれだけの
物・人を失しなってしまうんだな」と思う。だから、けし
て他人事ではない。これは、みんなに関わってくる大事な
ことだと思う。だれかがもしくは、国全体が「戦争」を提
案してしまったら戦争せざるをえないと思う。

その一方でウクライナとロシアは戦争をしている。今年
で3年をきった。時々、ニュースに出るのだが、それを見
るとあたり一面はボロボロ、人は血だらけの状態。しかも、
ウクライナ戦争でウクライナ軍は死者数が4万
600人以上、

ロシア軍で10万人以上、その他の人たちをあわせ、50万人ものがでている。多くの人が亡くなってしまっただけではすまされない。これは、50万人ものの尊い命が亡くなっていること。として、戦争を望んでない人でさえ亡くなっているかもしれない。そう思うとどれだけの戦争が過酷なのかと思う。だから、毎日、私たちは平和にありがたみを感じる。あたり前の生活がどれだけの幸せを感じるのか。それは、戦争でがんばった人たちが居たから今があると思う。私はいつまでも平和を願いながら、として、戦争で亡くなってしまった人の命が今でも残り続けること祈りたいと思う。

戦争や平和について思ったこと

烏野 芙花

わたしはこれまで戦争についてあまりよく知りませんでした。でも学校の授業で戦争や平和について学ぶ中で、たくさんのことを知り、自分の気持ちも変わってきました。戦争ではたくさんの人がけがをしたり、命をうしなったりします。家がなくなったり、大切な人と会えなくなったりすることもあります。わたしが見たニュースでは、小さな子どもが「学校に行きたい」と泣いていました。そのとき、わたしはとてもつらい気持ちになりました。

今のわたしの生活は、学校に行って、友達と話して、家

でご飯を食べて、夜はゆっくり眠ることができません。でもそれはあたりまえのことではなく平和だからできるのだと気づきました。

わたしが思う平和とは、戦争がないことだけではなく、安心してすごせること、みんなが笑ってすごせることだと思えます。まわりの人と助け合ったり、相手の気持ちを考えたりすることも平和につながると思えます。

今のわたしにもできることは大きくはありません。でも、友達と仲良くしたり、困っている人に「大丈夫？」と声をかけたりすることはできます。そういう小さなことの積み重ねが大切だと思います。

平和というものはわたしたちが思ってる以上に大切な

ものだと感じています。もし戦争が起きてしまったらわたし達の大切なものが一瞬でなくなってしまうかもしれない。家族や友達、そして自分の命も守ることができなくなるかもしれない。だからこそ、今の平和をもっと大事にしなければならぬと思います。

これからも、平和を守るために自分ができることを考え、実行していきたいです。世界中が平和で誰もが安心して暮らせるようになることを心から願っています。

戦争と平和

大西 心春

中学2年生に上がるまでに、学校の授業で戦争についてたくさん学習し、思ったこと、こういう行動をしていきたいと思う目標がいくつかできました。

まず、戦争について感じたことです。戦争はとにかく恐ろしいもので皆が楽しく暮らしていくには一番あつてはならないものだということを実感しました。警報が鳴り、爆撃が起こってしまった前は、何1つ変化なく、いつもどおり暮らしていたのに、爆撃のせいで、そのいつも通りの生活が壊されてしまったと考えると、その場に居合わせた人

達はどれだけ大変な想いをしてきたか、私はその現場を想像しただけでゾツとしてしまいます。空襲によってうばわれてしまった百十一人の尊い命の事を忘れずに、これからの当たり前のようである毎日、感謝の気持ちを、感謝の気持ちを持って過ごして、身近な友達や家族を大切にしながらこの東大和市で暮らしていきたいと思いました。

次に、これからの目標についてです。私は実際に空襲を体験したわけではないので動画や資料からしか、戦争の恐ろしさを知ること学ぶことができませんが、実際に体験した人たちのお話をもとに、もつとたくさんの人に戦争について知ってもらおう、ということが自分の中での目標になりました。戦争によって失われてしまった尊い命を誰も忘れ

ずに、心に刻んでほしいという思いから、この目標をつくることができました。小さい子供にはまだ早いような内容かもしれないですが、いろんな人に語りついでいけるようにしたいです。

最後に、戦争がある限り、誰も良い思いをしない事、絶対にあってはならない事、空襲などの襲撃のせいで尊い命がうばわれたことをしっかり自分の心の中に刻んで生活していこうと思います。もう誰も、悲しい思いをしなくてすむよう、はやく戦争がなくなっしてほしい、命を失いたくないとも同時に実感しました。

戦争の悲惨さについて

大西 舞歩

今、南公園では家族連れで遊びに来る場、花見に来る場など来る人全員が笑顔になれる場。しかし、七十五年以上前にはここ、南公園は戦場だった。日本全体がだ。戦争で多くの人の命が失った。とてもおそろしいことで、昭和20年、旧日立航空機株式会社立川工場でも空襲が何回もあり、あわせて11人の方々が亡くなった。もちろん、現在の南公園の中に建つ変電所も同じような被害を受けた。

私は、「沈黙の証言者」を見たとき、改めて戦争のおそろしさや悲惨さを強く感じた。なぜ「戦争」というものは、

なんの罪もない人が殺されてしまうのか。私はこの疑問をずっと抱えている。今の日本は、美味しいものを食べたり、学校へ行つて勉強したり、友達や家族と出かけたりと、とても贅沢な暮らしを送れている。しかし、戦争中にはそのようなことはできなかつた。映像を見て、とくに六、七分の攻撃でもすごく長く感じるといふ体験者の方の言葉が印象に残っていて、攻撃してくる怖さがとても伝わってきた。

現在の日本は、平和だが、世界中ではいろんな国が今も戦争を行っている。ロシアとウクライナの戦争は始まって約3年の月日が経ち、亡くなった方や苦しんでいる人々も大勢いるなか、2年前にはパレスチナ・イスラエル戦争も

始まってしまった。私は小学5年生頃まで戦争は本の中でしか知らなく、恐ろしさがあまり目に見えないものだった。ところが、最近では破壊された建物や人々が苦しんでいる様子などがよくテレビのニュースで出てきて、放送される都度、戦争の怖さを実感する。一日でも早く戦争のない世界がくることを願いたい。

そして、自然豊かな東大和、南公園にそびえ立つ変電所は、「西の原爆ドーム、東の変電所」と呼ばれる戦争遺跡だということを知ってもらいたい。

建ち続ける意味

倉田 桜佑

僕は戦争体験映像記録を視聴してみて、思ったことが三つあります。一つ目は戦争の恐ろしさについてです。たつたの七分で、百十人ほどの犠牲がでてしまったという事実や、実際に戦争を経験したことがある方々のお話から、戦争がいかに恐ろしく、もう二度と起きてはいけない悲惨な事態だということを再確認できました。

二つ目は旧日立航空機株式会社変電所が建ち続ける意味についてです。今も尚、南公園の中心に建ち続けている変電所ですが、映像の内容から重要な戦災遺跡であること

が分かりました。実際に戦争を経験したことがある方々は少なくなっており、その記憶を今に伝えることが難しくなっていることも知れたので機銃掃射や爆弾の爆裂痕のある変電所を残していくことにより、戦争の恐ろしさを今後も伝え続けていくことができるのではないか、と思いましたが。また、変電所を残していくことにより、日本だけでなく世界の人々の戦争に対する考え方が変わっていくことを願っています。

三つ目は今後の生活についてです。僕は今回初めて戦争体験映像記録を視聴したのですが、たった一回の視聴でここまで心に残る映像があるということに少し驚きました。映像の内容から、戦争の恐ろしさの再確認や変電所が建ち

続ける意味などについて知ることができました。そして、今回得ることができた戦争に関する知識を活かし、常日頃から戦争がからんでくる出来事に関心をもって生活を送っていききたいです。

今の生活は当たり前前ではないと思つた

倉光 咲衣

私は「平和」をそれほど大切なものと考えたことは正直あまりありませんでした。授業やニュース、特集番組などでときどき「戦争」という言葉を耳にするだけで、今私たちが住んでいるところでも実際に戦争をしていたことは想像もできませんでした。しかし、「沈黙の証言者」の映像を見て、戦時下に暮らしていた人達は常に警報が鳴つたらずぐに逃げられるよう、家や工場の近くに防空壕を掘り不安と恐怖におびえて毎日を過ごしてきたり、大切な人を何人も失つたりしてきたことを知り、戦争はたくさんの人

を傷つけてきたことを改めて知りました。また、今、南公園にある変電所にあいているたくさんの穴が映像で流れて、爆弾が一体いくつ落とされたのか分からないほど穴がありおそろしいなと思いました。私だったら絶対にそんな生活には耐えられないだろうなと思いました。

私は、この機会を通して戦争はもう絶対にしてはいけな
いことで、ずっと多くの人が幸せに暮らせるような平和が
続くことがいかに大切で、しかし当たり前ではないと分か
りました。これからは、今「平和」に「安心」して恐怖や
不安におびえることなく普通に過ごしていることを大切
にしたいと思いました。また、ニュースなどで他の国で戦
争や紛争の特集を見たりするときは、ただの他人事、私達

には無関係ではなく過去に日本であつたような辛い思いをして傷ついている人がたくさんいたことを思い出しています。これから、すぐにでも世界中で戦争がなくなつてほしいと思ひました。

戦争の悲惨さ

坂本 來美

私は小学4年生の頃に広島の実爆ドームに行きました。テレビや教科書で写真を見たことがありましたが実物はとても大きくて思ったよりもずっと痛々しく、強い衝撃を受けました。建物だけでなく、この場所からも命を失った人の思いが残されているように感じました。

戦争は一瞬で多くの命を奪い、人々の幸せを壊してしまいます。大切な人と過ごす日々も将来の夢も、一発の爆弾で消えてしまいます。だからこそ、平和を守り続けることが、私達にとって最も大切なことだと思います。

平和とは、ただ争いがないということだけではなく、人と人が認め合い、助け合って生きることです。学校でいじめをなくすこと、友達の意見を大切にすること、困っている人に手を差し伸べること。こうした小さな行動の積み重ねが社会全体の平和につながっていきます。

でも、世界には、今でも戦争や紛争をしている国がたくさんあります。テレビで見るたび「なぜまだこんなことが起きているのだろう」と思います。どこの国の人でも、大切な人や幸せな日常があるはずです。戦争はどんな理由があっても決して許されないことだと思えます。

私たち一人ひとりにできることは小さいかもしれませんが、その小さな思いや行動が集まることで大きな

力になります。これからも私は平和について考え、未来のために行動できるような人間でありたいと思っています。そして未来の世界がもっと平和で誰もが笑って暮らせる世界になっていることを心から願っています。そして、あの日見た原爆ドームは忘れないと思う。

当たり前の平和を永遠に

鈴木 勇希

僕が小さいころから平然と建っている変電所。でも今思えば、変電所以外に戦争をしていた時の建物なんて身近にはなく、この変電所が、どれほど貴重なもので、悲惨な戦争の歴史を語っているかを「沈黙の証言者」を視聴して改めて知ることができました。僕はもう二度と戦争で苦しむ思いをする人が出ないために深く考えた後、思ったことがあります。

まず、我々が目指すゴールについてです。僕の思うゴールは「平和を当たり前にする」ということです、これをき

いて「今も平和じゃん。」と思う人もいるかもしれませんが。しかし、細かいところまで目を向けるとロシアとウクライナなど世界各国で紛争や戦争があり、日本は防衛費を増やすなどいつ日本が戦争に巻き込まれてもおかしくありません。これをきいて平和と言えるのでしょうか。そのため僕は「平和を当たり前にする」ということが第一のゴールだと考えました。

次に、縦にも横にもつながりを広げ、戦争について知ってもらおうということが重要だと考えました。たまたにニュースの特集などで、戦争の体験を後世に伝えるという取り組みが取り上げられているのを見たことがあると思います。このような縦のつながりはよく見ますが、他の国の人に

知ってもらおうような横のつながりは比較的少ないと感じました。平和を続けていくために、日本が戦争起こさないというのが大前提ですが、国どうしが戦争はダメだという意識を持つことも必要だと考えたのです。

平和な未来にするため、僕たちの世代が戦争について理解し、語り継ぐことが大切になってくると思うので、「東の変電所」がある東大和市の市民として責任を持って戦争の悲惨さを伝えて行きたいです。

「戦争」をなくし、「戦争」の言葉を残す

竹内 理紗

今から八十年前、東大和市は空襲を受けた。

一九三八年、東大和市に軍用機のエンジンを製造するための工場が建てられ、一万三千人以上が働いている大きな工場だった。太平洋戦争末期になると、三回も工場が攻撃を受け、百人以上の人々が亡くなった。防空壕に逃げた人々も。さらに三回目の攻撃では、工場の八割方壊滅した。という過去が東大和市にある。

一昨年、学校のフィールドワークで、都立東大和南公園に訪れた。その際に、「西の原爆ドーム、東の変電所」と

言われている、市の文化財に指定された変電所の中に入った。外側から見ても分かるように、爆撃が当たった時の生々しい跡が数えきれないほどあることが衝撃だった。また、あの硬いコンクリートを貫通するほどの勢いだったことが分かり、怖くなった。しかし、南公園にある変電所はたくさんあった工場の一つだったから、他の建物はもつと酷かっただろう。

「戦争」は、やればやるほど失うものが増えていく。大事な場所、大事な仲間、大事な家族。昨日まで元気に会っていた、あの人がもうこの世界からなくなってしまうた、そんなことが起きてしまうかもしれない。それだけではない。攻撃をする側だって、国からの命令で戦いたくなくて

も戦わないといけないう辛い思いだったかもしれない。

このように、「戦争」は残酷で悲しいものだ。だからこそ、この世界から「戦争」をなくし、平和な世界にしていなくてはならない。日本の過去に戦争があつた以上、「戦争」という言葉を残し続けなければならないと思う。後世に伝えるためにも、変電所は大きな力があり、大事な建物だ。

私は一刻も早く、平和な世界になるよう、願う。

平和の尊さ

武田 夏実

私は戦争がどれだけたくさんの人を苦めていたのかわかりました。

「沈黙の証言者」の映像を見て、たったの3日間で百十一人もの方が亡くなったという事実にとっても衝撃を受けました。尊い百十一人の命が一瞬にして奪われたのです。戦争をすることで本当だったらもつと長く生きられたはずの方が命を落としてしまったのです。その人たちの家族もとてもつらい思いをします。戦争の時代に生きていた人たちは1日中またミサイルがきたらどうしようとしても

怖かったと思います。1日を生き抜くのがとても大変だったと思います。そんなつらいことをしたって誰も喜びません。戦争を今もしている国があります。私は今すぐやめろべきだと思います。私は戦争を経験したことが一度もないが、絶対にやっつてはいけないことということは分かります。戦争をしたって人がどんどん傷つけられるだけだからです。今までも普通の暮らしができなくなってしまったり、学校にも行けません。家族とも離れ離れになってしまったり、学校にも行けなくなり大好きな友達とも会えなくなったりしています。そんな世界は絶対良くないです。一人一人に人権があります。その人権を壊しているのが戦争です。全世界の人々が一日三食温かいご飯を食べ、家族や友達と触れ合うことができ

る世界にするべきです。私は今安全で暮らせているのに世界では今戦って苦しんでいる人もいると思うと心が苦しくなります。同じ人間なのに、生まれた国によって自由を奪われる人がいるのはおかしいです。私は今すぐ戦争をやめて全ての人が平和に暮らせる世界になることを祈っています。

苦しい戦争と平和の大切さ

蓮見 樹南

平和とは、戦争の歴史を知ることから始まると思います。「沈黙の証言者」を見て、原爆の怖さ、恐ろしさを知りました。たった1つの原爆でたくさん尊い命が奪われてしまいました。これはとても悲惨なことです。もし、「その中に私の大切な人達がいたら」と考えると、とても怖くなります。そして、原爆により、大切な人の命を奪われてしまった人々は数多くいると思います。戦争はただただ悲しい出来事だと私は思います。こんなにたくさん尊い命を奪われてしまっても戦争をしなくてはならないのでしょうか。

私は「日本が経験した戦争」を戦争体験者として語り、反対することはできません。ですが知っていくことはできません。なぜ戦争を起こしてしまったのか、戦争により何人の命が失われてしまったのか、どうして現在も戦争が続いてしまっているのか。これらのようなことを積極的に学んでいきたいと思っています。そして、身の回りの人達に戦争のつらさを伝えていきたいです。

また私は今、幸せな生活を送っています。当たり前のように朝目覚ましで起き、当たり前のように学校に行き、当たり前のようにお腹いっぱい温かいご飯を食べ、遊んで、寝ています。こんな当たり前の日々を壊わしてしまうのが戦争です。私は戦争をしている国々の人々にも私が感じて

いる「当たり前前の幸せ」を感じる権利があると思います。そんな幸せを奪ってまで戦争をする意味はありません。

1度失われてしまった大切な命や幸せは元には戻りません。ですが、これから守り抜くことはできます。そのためにも、戦争の苦しい歴史を知り、平和の大切さをたくさんの人に伝えていきたいと思えます。

戦争と平和の共通点

林 菜々子

「戦争」と「平和」と聞いたら正反対のものだと思う人が多いと思います。しかし、それぞれ2つには大切な共通点があると私は考えました。

この2つにはどちらも人間の気持ちや行動からできていると思いました。戦争は争い、憎しみなど強い思いが込められ、相手を理解しようとしなない心からはじまります。逆に平和は思いやり、相手を思う気持ちから生じます。つまりどちらも人間の気持ちや行動からできていることなのです。また、これからの日本がどちらかなのか誰もわか

りませんが、今後を決められるのは私達人間の行動力や感情が未来を大きく左右する力だと思えます。その上でどちらとも一度はじまるとなかなか終わらせられないという点もあります。戦争では相手に危害を加え人々に苦しみ、悲しみも感じます。平和は、安心・発展にもつながることもあります。

このように私は正反対と思われがちな言葉から別の視点で考えると新しい発見を見つけることができました。「戦争」と「平和」はどちらも人間がいるからこそ起こってしまふことですが、私は相手のことを理解して色々な視点で広く物事を観察できる人になりたいです。そして日本だけではなく世界でも戦争というキーワードよりも平和

というキーワードが多く広がって安全な国が増えてほしいです。

戦後80年事業

戦争体験インタビュー

被爆者 田戸 サヨ子氏 インタビュー

昭和20年8月6日 朝8時15分

当時14歳だった田戸さんはこの日、学徒勤労先の日本製鋼所の鑄物工場が月に1度の電休日だったため、市立第二高等女学校へ登校していました。爆心地からおよそ3kmの地点です。

8月6日朝7時半に、警戒警報解除になったので電車（路面電車）に乗って学校に行きました。

自分の机に座って、荷物からノートを出そうと思った瞬間に、真っ白な光がピカって光ったんです。私は慌てて、

目と耳を塞いで机の下に潜ったんですね。そして何秒か後にもすごい風が吹いてきたんです。

私が机の下に潜っている間に、クラスメイトがわあわあ騒ぎだったので、机の下から出てみたら、ガラスが全部飛んできて、みんなの体や手に刺さって、血だらけになって泣いてるんですね。

私は全然怪我をしなかったんですが、教室の入り口の厚手のドアが倒れて足を挟まれたお友達の上野さんが「痛いや痛いよ。」って泣いていました。

怪我をしていなかったのは、私と田中さんというお友達だけだったので、足の骨が折れたかもしれない上野さんを、ふたりに学校の近くにあった共済病院へ連れて行こうと

思い、出かけました。

そしたら向こうから、髪の毛をぼさぼさにして、真っ黒な顔して、みんな服もボロボロでね、裸のような人もいる。そして手を前に出して、手の先から汚いボロボロのようなものをぶら下げて、そういう人たちに会ったんですね。いったいこの人たちはどうしてこんな格好してるんだろううと思ってたんですが、よく見たらこのぶらさがってるのは、手の肌が火傷でむけてしまつて、それが手からぶらさがってたんですよ。

（後から知ったのですが）ピカッと光った温度は七千度ぐらいあって、それに当たった人はみんな火傷したんですね。

治療の済んだ上野さんを、家が近くだったので連れていきましました。

さあ、自分の家へ帰ろうと思って、そのときになってようやく自分の家のことが気になりだした。うちはどうしたかなと思ってね、電車に乗って帰ろうって思っても、もう電車なんか通ってないですよ。

仕方がないので電車をどんどん歩いて、御幸橋ついでうとこまで来たんです。そうしたら橋の向こうがね、ものすごい燃えてるんですよ。そこから向こうに行けないくらい。電車道の端っこに座ってね、焼けるの待ってたんですね。かんかん照り付ける暑い中で、何時間も座ってたと思う。

ある程度、火事が治まった後、田戸さんとお友達の田中さんは改めて電車道を通り、帰ろうとしました。

街の大きな建物が無くなって、先の方に、たくさんの方がうづくまってるんですよ。髪の毛がぼうぼうで、真っ黒な顔して服もボロボロの人、もう生きてるか死んでるかわかんないのよな人たちがたくさん道端に座ってるんです。その人達から「助けてください：」「水ください：」「お水ちょうだい：」「水、お水：」「日赤（病院）へ連れて行って：」とみんな言い出したのですが、水は無いし、こんなにたくさんの人をどうやって病院に連れていくの

と思つてしまい、田中さんと走つて逃げ出してしまいました。

兵隊さんが片付けてくださった紙屋町までの電車道は通れたのですが、そこから（実家近くの）相生橋方面（※爆心地の方面）は全く手をつけられてなかつたものですから、広い電車道に足の踏み場もないくらい物がいっぱい飛んできていました。何より人がいっぱい死んで転がっていました。

今ここに人がひとり死んでいたら、それこそ大ごとですよ。でも、あんなにたくさん死んでたらもうね、人間の心がなくなつて平気になつてくるんです。「あ、ここにも。あそこにも。」というくらいで、可哀そうにとか、気の毒

にとか思わなくなりました。とにかく踏まないように歩くだけでした。

田戸さんの当時のご自宅は爆心地の近く、相生橋の北にある鷹匠町というところにあり、当時はお母さん、お姉さんと暮らしていました。

やっとの思いで相生橋までたどり着きました。そしたらね、なんと広島は、全部何にもなかったですね。あの橋のすぐそばに産業奨励館があって、今の原爆ドームですね、あの建物は残ってましたけど、もうずっと西の方は、山がすぐそばに見えるぐらいに、ずっと何にもなかったん

ですね。もちろん私の家の方は、見ても何もなかったから、もう駄目じゃと思ってね、座り込んで、友達とふたりで泣きました。いっぱい泣きました。いっぱい泣いた後、友達がどうするって聞いてきたんですね。川内村に指定の避難所があったので、10 kmも先ですがそこに行くしかない歩き出したんですね。

その頃は町内に、防火用に畳2畳くらいのコンクリートの水槽があつて、その中に人がいっぱい入って死んでるんですね。鉛筆立てに鉛筆をいっぱい立てたように、人が入って真っ黒になって死んでました。

十日市の電車道の別れ道のところに来たら、一人の中学生が話しかけてきました。昔の事だからあの軍隊のような

服を着てズボン履いて、脚にゲートルを撒いて、靴は地下足袋を履いてました。その子が、びつこを引きながら私に近づいてきて、僕はこつから山本っていうところに帰りたいんだけど、脚が痛くて歩けないから連れて帰ってくれませんかって言ったんですね。

その中学生は、足を怪我していて、足の指の骨が見えるくらいでした。

私は、山本って言ったら川内村行く通り道だから、いいよって引き受けて田中さんと肩を貸して一緒に行くことになりました。

途中、お友達の田中さんは自宅へ帰るために別れたため、

この中学生を田戸さんはひとりで山本の中学生の家まで送りました。中学生のご両親はとても喜び、田戸さんを迎えました。暗くなってきたので、中学生のお母さんからの勧めで、田戸さんは泊まることになり、食事やお風呂が提供されました。

1年後、田戸さんは縁あって、この中学生の家を訪ねる機会を得ました。この時、再会した中学生のお母さんから「あなた生きとられて良かったですね。うちの子はね15日に死にました。」と言われたそうです。その悲しそうな、私が生きてるから羨ましそうな顔を、田戸さんは今でも忘れることができないといいます。

翌朝、私は川内村の避難所となっている農家に行きました。

いろいろな人が座ってられたんですけど、母は来てなかったんですね。やっぱり母は死んだかもしれないなあと、私はがっかりして、あがりかまちのところ座って、ぼーつとしてたんです。そしたら後ろから、「あんたサヨちゃんじゃないの。」って、近所の友達のスミちゃんのお母さんが声をかけてくれました。ただ、私のことを見て「うちのスミ子は、まだ帰って来んのよ、うちのスミ子が帰って来んのにあんたどうしてそこにおるん。」って言われて、私はその時ほど生きてはいけなかったかなと思ったことなかったです。でもね、私が大人になって子供ができて、

初めて、その時スミちゃんのお母さんの気持ち分かるようになりました。それからスミちゃんのお母さんは私の手をぎゅつと握ったまま、離さなかったんですね。

スミちゃんは見つからないままでしたが、田戸さんは一緒に暮らしていたお姉さんと避難所で再会しました。

姉は生きとつたんです。爆心地から1・5 kmくらいの住吉橋のところにある郵便局に勤めてたんですが、姉もピカッと光った時に、郵便局の事務机の下に潜ったから、怪我也何にもしてなかったんです。ふたりで「生きとつたんじゃないやね、よかったよかった。」って喜びました。

姉が着ていた白いブラウスは、「黒い雨」に降られて黒々と汚れていました。この「黒い雨」を浴びたため、姉は60年経ってから白血病になり、半年間苦しんで死にました。原爆が恐ろしいのは、放射能の影響が何年経っても現れてくることです。

その姉とふたりで焼跡に行ったんですけど、母らしい人は見つからなかったんですね。

（自宅近くの）本川の方へ行くと、川の中で死んだ人がみんな寝っ転がっている。川中に降りてひとりずつ見てまわったんですけど、もうね真っ黒だしね、本当はようわからんのですよ。顔形や小物とかで、想像しながらこれでもないね、これでもないねって言いながら見て回りました。

でも全然見つからないんですね。

どうしても見つからないまま、早く戻らないと（避難所へ戻る）トラックに置いてかれたらいけないから、今日はこれで帰ろうって言って、諦めて焼跡に帰ったら、トラックは出た後だったんですね。もう置いてかれちゃっていたんです。

ところがこのことが幸いし、ふたりが歩いて避難所へ戻る途中で、たまたま通りすがった収容所で、お母さんと再会できました。

（収容所の）壁として垂れ下げている、むしろとむしろ

の間10 cmぐらいから、見覚えある母の服が見えたんですね。もしかしてあれお母さんじゃないって言ってふたりで入ってみたら、そこにお母さんがいて、「お母さん生きとつたんだね。」って言ってね、ふたりで母の腕にしがみついて、わあわあ泣きました。

「お前たちも生きとつたんか、よかったよかった。」って、母は畳一枚の中に寝かされたんです。母の話を聞いたらピカッと光った時に、平屋で下敷きになって、気絶したそうです。煙の臭いで目が覚めて、中広町の親戚のところに行こうと思って広瀬橋というところまで来たんですが、橋が落ちてるから向こう岸に行けない。後ろから火が迫ってくるから川の中に入って動けなくなっていたところだ

兵隊さんに助けられ、この收容所まで連れてこられたって
言っていました。

母は、たいして怪我してなかったんです。胸の辺とか手
の辺に少し擦り傷があつたくらいだったのですが、何しろ
ものすごい熱を出していました。

その晩は、母のそばで寝ました。母のそばで寝ながら、
夜中に隣の畳に寝ていたおじさんが、「お母さん！お母さ
ん！」って叫び出されたんですね。私は、今にも死にそう
な人のそばにすることが怖くて怖くてね。母にしがみついで、
目をつぶってた。「お母さん：お母さん：」っていう
声はだんだん小さくなつて、その人はとうとう死んでしま
われました。

翌日、姉は中広町の親戚の家に行き、私は、母の傍で川から水を汲んできて、母の顔の手ぬぐいを替えていました。

昼に炊き出しの白いご飯のおにぎりが届いたんですが、私は、白いご飯を当時は食べたことがなかったので、白い塩だけのおにぎりだったんですが、とにかくおいしかったことは忘れられません。今でも、炊き立ての白いご飯を見るたび、あの日のことを思い出します。今当たり前に食べている白いご飯は、当たり前じゃないんです。

翌日、田戸さん姉妹とお母さんの3人は、お母さんの実家へ移りました。ここで、疎開されていた田戸さんの妹さんとも再会できたのですが、お母さんの容態は良くはなり

ませんでした。

なお、田戸さんにはお兄さんもいましたが、当時は海軍として横須賀の基地にて従軍されていました。

14日のお昼ごろに妹が着いて、もう母が喜んで妹を抱きしめました。そして午後2時ぐらいになった時、母が、みんな集まってくれと言って、枕元に集め、「もうねお母さんダメかもしれんからね、お前たちは、どうか、兄妹仲良しで、これから先に人様に迷惑をかけるような人間になっちゃいけないよ。お兄さんがもし帰ってきたら、お兄さんを大事にして、みんな兄妹仲良く暮らすんだよ。」って、そして周りの親戚達に、この子たちのことを頼みます、頼み

ますっていう声が、だんだん小さくなって、母は死んでしまいました。

母が死んでしまってから、もう生きていく元気ありませんでした。でも10月27日に兄が海軍から生きて帰ってきてくれたおかげで、私たちは戦災孤児にならないで、戦後生きていくことができました。

その後、田戸さんは原爆症の発症もなく、お子様にも恵まれて現在に至ります。ご自身の被爆体験を自費出版された想いをこのように語ります。

もともと文章を書くことが好きでしたから、原爆に遭つ

たことは、書いておきたいと思っただけです。子供たちからも「こんなことがあったんだよ」と、孫やもつと下の子たちにも教えたい、家族にこんな人がいたんだよってことを、知らせておきたい。」と勧められましたので、家族の想いを汲んで自費出版で作ってみようって思い立ちました。これからも核兵器が使われないよう、生きている間は伝えていきたいと思っております。

ご自身の被爆体験をいろいろなところでお話される田戸さん。

若い方たちに、残したいメッセージをうかがいました。

あの時代は勉強したくても出来なかった。生きたくても生きられなかった。今は自由に、思う存分勉強もできます。本もよく読んで、自分を磨き、平和な時代に役立つ人材に成長してくださいを願っています。

遺族会 小嶋 千代子氏 インタビュー

小嶋千代子さんの義父の小嶋熊蔵さんは、消防組に勤めておられました。が、招集を受けて一度現役を務め終えた折、再び招集を受け、東部第三部隊に入隊し、フィリッピン・ミンダナオ島に出征することとなりました。このことを、熊蔵さんの妻むめさんは電報で知り、慌てて上野駅へ見送りに向かいます。

千代子さんは、むめさんから、熊蔵さんが出征する際の上野駅での見送りの様子を、聞いていました。

次の文章は、その時の様子を、千代子さんが話してくれたものです。

ある時、(熊蔵さん出征の)電報が来て、裏の人からも、「これはすぐ支度して行ったほうがいいよ。上野駅へ行けばいいんだよ」って言われて、子ども2人(長男と長女。長男が後に千代子さんの夫となる。)を連れて、1人(二男)はまだ赤ん坊だったから、家に置いて、上野駅までの行き方をみんなに説明してもらって行きました。

上野駅に着いてすぐ、(駅員から)「あの列車がそうですよ」って、もうそれでそのまんま外国に行ってしまった。部隊も何にもわからなかった。どこに行ったかもわかんない。

兵隊に行ったときのまんまで行ったから、何ひとつ送れ

なかった。「パンツ1枚でも持たせてやればよかった」と、おばあちゃん言ってたけどもね。

（熊蔵さんは）最終的には、ミンダナオっていうところで亡くなったんですが、亡くなったつちゆう連絡が来て、送られてきたものを開けてみたら幣束（神に供える捧げもの）が入ってたって。

おばあちゃんは、（送られてきたものは）骨かと思ったけど、「なんで幣束なんだ。髪の毛の1つでも、爪でもいいから、入れてもらいたかった」って言ってたよね。

後に、熊蔵さんと一緒に戦地に行かれていた方が訪れて、戦地の様子を語ってくれたという。

一緒に戦地に行ったっていうおじさんが帰ってきて、武蔵村山の方で、部隊が一緒だったって言ってました。

（戦地では）やっぱりもう食べるものがなくて、ねずみなんか捕まえて食べてたって、そう話してったよね。蛇だとか、ねずみだとかそういうものをね、山にいるものをつかまえて食べたって。

「そんなねずみなんか食べてたんだ。それでも、生きていける人は生きられたのかなあ」なんて、おばあちゃん話してさ。

小嶋家は、長男の熊蔵さん、二男の茂三郎さん、三男の

良平さんと3人の息子さんがおりましたが、皆さんが海外へ出征し、終戦の年となる昭和20年に戦死されたとのことでした。

親（熊蔵さん3兄弟の親御さん）にしてみればね、徴兵されてあつという間に戦地に行かれたんですから、母親や父親は、随分シヨクだったろうなあとと思うよね。男3人の女3人の6人兄弟で3人の息子全部、命取られちゃつてねえ。辛かっだろうなと思う。

二男の茂三郎さんは、実家の竹屋をやつてたわけだよね。結婚して、子供ができたけど、産まれないうちに兵隊に行っちゃつて、名前だけつけといたつて言つてたね。女の

子が産まれて、写真も送ったけど、戦地には届かなかったろうなんて言ってたね。

三男の良平さんはね、一生懸命勉強しておまわりさんだったって。でも、やっぱり赤紙が来るからね。いや応なしに。それが戦争だよね。

千代子さんにとっての当時の思い出など、何か覚えてらっしゃる限りでお話いただけますか。

空襲があると、私なんか女の子だから怖くて、防空頭巾かぶって防空壕に入っちゃったんだけど、うちの兄貴なんかは、「俺、死んだっていいんだから」なんて防空壕に入っ

たことはなかったね。

一度ね、B 29 かよくわかんないけど、大型の戦闘機が上がった瞬間に、急に火を噴いて落ちたところを見たこともあつて。撃たれたのかね、戦闘機自体から火が出て、どうなったんだかよくわからないけど、さーつと落ちていった。あれは大変だったね。

私は当時、武蔵村山の第二分校の1年生で、その頃の教科書は、先生が全部ガリ版で刷って、ふたりで見なさいねって。教科書がなかったんで、先生が、毎日毎日プリントを刷ったやつを渡してくれた。

私の父親は、(私を含めて)子供が5人もいて、それで、兵隊に行くわけだけど、3か月招集って言うのだった。

ほんで痩せて帰ってきたけどもね、（父は）下駄職人だったからね、あの頃は下駄だから。靴じゃないからね。帰ってきててもすぐに、また下駄作ってたけどね。

畑も一反五畝ぐらい借りて、麦や野菜を作ってたんだけど、下駄を持つてって、農家の人と物々交換。そんなことをよくしてたよね。もう食べ物がそんなにないんだからね。

着るものは、点数制で布をいただけたみたいで、うちは子どもが5人もいたので、近所のひとが切符を分けてくれたりして、洋服なんか縫ってもらったりしてね。あと、妹が生まれるとおむつがないから、何かでおむつを代用しようってね。飛行場のところで油だらけになった布みたいな、おっきなのをもらって切って、油を抜いて、それでおむつ

作ったりしたな。あるものを工夫して使ったっていう話は、あちこちで聞きますけど、今じゃ考えられないよね。

あと、戦争のときに、鉄がないからって言って何もかも持たてかれちゃったって。鍋とか釜とか。鉄製品のようなもの、みんな持ってたんだよね。

戦争って嫌だよな。やっぱり、嫌だよ。早く、世界で戦争を終わりにしてやればいいのにとと思うよね。

東大和市平和都市宣言

平成二年十月一日 宣言

恒久平和の実現と、核兵器の廃絶は、全人類共通の願望である。

世界の世論のたかまり、各国の相互理解により、核兵器の廃絶にむけて曙光が見えてきたとはいえ、依然として地球上には多くの核兵器が貯えられている。

世界で唯一の核被爆国の国民として、また、国際社会の平和と協調を理念とする憲法をもつ国の国民として、人類の安全と幸福のために、地域紛争を含むすべての戦争の防止と、あらゆる核兵器の廃絶を心から願うものである。

ここに、平和を愛する全世界の人々と手を携えて、戦争と核兵器のない世界の建設にむけて努力することをあらためて誓い、東大和市が平和都市であることを宣言する。

東京都東大和市

東大和市戦争体験映像記録

「沈黙の証言者」～私たちのまちは戦場だった～

東大和市では、戦後七十年の節目の年に、平和の大切さを再認識するとともに、戦争を風化させることがないように、旧日立航空機株式会社に勤務されていた方々の戦争体験談、旧日立航空機株式会社変電所の歴史や現在の姿をまとめた映像記録（DVD作品）を制作しました。

6人の戦争体験者の生々しい証言と貴重な資料をもとに、変電所の歴史や東大和市の戦争の記憶をたどります。

※本作品のDVD（48分）を市内図書館、市役所市民生活課で貸し出しています。

※ダイジェスト版（12分）が、インターネットで視聴できます。

YouTube「東大和市公式動画チャンネル」にアクセスするか、左記「QRコー

ド」からご覧ください。

QRコード



戦後70年 東大和市 戦争体験映像記録

沈黙の証言者

～私たちのまちが戦場だった～



戦災建造物
旧日立航空機株式会社変電所
(東大和市指定文化財)

 東大和市

 DVD
VIDEO

令和七年度 平和文集

「いま、語り継ぎたいこと」

～戦争と平和～

令和七年八月発行

編集・発行 東大和市 市民生活部 市民生活課

印刷 有限会社サンプロセス

恒久平和を願って



東大和市平和月間
シンボルマーク